



左図の銅鐸は、国宝 指定名称:袈裟襷文銅鐸 伝香川県出土
1個 弥生時代・前2～前1世紀 東京国立博物館 J-37433

江戸時代に讃岐国（現在の香川県）で発見されたと伝える銅鐸。吊り下げるための鈕（ちゅう）と身からなり、身は上から下へしだいにひろがる扁平な円筒状である。浮き上がった線（突線）で鋸歯（きょし）文、連続渦巻文、綾杉文が表されているほか、身の表裏は斜格子文の帯でそれぞれ6区に分けられ、僧侶の袈裟襷の模様 に似ていることから、この名がある。

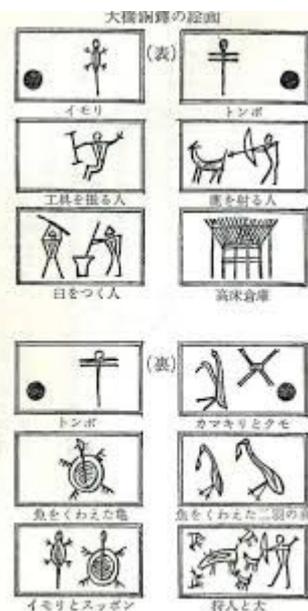
きわめて似た銅鐸として、神戸市桜ヶ丘遺跡出土の4号、5号銅鐸、江戸時代の画家、谷文晁（たにぶんちょう）所蔵と伝える銅鐸（拓本と模写だけが残る）があり、いずれにも区切られた中に同様な絵画が描かれている。これらはともに同じ製作集団によって、桜ヶ丘5号、4号銅鐸、谷文晁所蔵銅鐸、本銅鐸の順で鑄造されたと考えられ、数ミリの厚さ、鑄あがりのよさなどに、優れた鑄造技術を見ることができる。絵画は、片面に上段からトンボ、イモリ、シカを射る人、工字型の道具を持つ人（糸を紡ぐ人ともいわれる）、高床切妻の建物、竪杵で臼をつく人が、もう片面にカマキリ、クモ、魚を食べるスッポン、魚をくわえたサギ、スッポンとトカゲ、イノシシを狩る人とイヌが描かれ、男性の頭は○、女性は△で描き分けられている。

弥生時代の農耕社会や生活環境を知るうえで貴重な資料であるが、その解釈についてはさまざまな説があって、銅鐸の用途、埋納の理由とともに現在なお謎が多い。

しかしこの絵画を、絵文字として読んだ人がいました。

大羽弘道著「銅鐸の謎」光文社刊(s49.5.10)から紹介します。

絵文字の意味→表音→解読の順で書き以下のように読みます。



表面（右から下へ）

- 1、トンボ→アキツ→秋津
- 2、鹿を射る人→イルカ→入鹿
- 3、高倉倉庫→タカクラ→高御座
- 4、イモリ→イモジ→鑄物師
- 5、工具を振る人→フルヒト→古人
- 6、臼をつく人→キヅク→造く

裏面（表と同じ順で読むため、左から下へ）

- 1、トンボ→アキツ→秋津
- 2、魚をくわえた亀→マナカミ→真神
- 3、イモリとスッポン→イモジのオヒト→鑄物師の長
- 4、カマキリとクモ→カモ→加茂
- 5、魚をくわえた二羽の鳥→ツヒナトリ→角足
- 6、狩人と犬→タスク→助く

これらをつなげて行くと

表面：アキツ イルカ タカクラ イモジ フルヒト キズク
裏面：アキツ マナカミ イモジノオヒト カモ ツヒナトリ タスク

表面：秋津に入鹿、高御座のとき、鋳物師の古人造く
裏面：秋津真神の鋳物師の長、加茂の角足助く

と読んで、「蘇我入鹿が高御座」としました。この後、自説を展開していきます。しかしすぐ気がつくようにこの銅鐸は、弥生時代・前2～前1世紀とされています。蘇我氏の活躍は、6世紀～7世紀前半とされていて、年代が全く一致しません。それでも、彼は銅剣と銅鐸が一緒の出土例が、明治24年の広島市福田木ノ宗山遺跡での銅剣と銅戈が銅鐸1個とともに発見されたのはこの一例だけだったとして、銅鐸が弥生時代だけではなく時代がもっと下がるのではないかとの自説を展開しています。誠に、ユニークな説となっています。しかしこの後、島根県出雲で、大量の銅剣と銅鐸が発見され銅鐸弥生期説は確かなものとなってきたと考えられています。

「蘇我入鹿が高御座」は支持されているのでしょうか。

解説：蘇我氏 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

蘇我氏（そがうじ、そがし）は、「蘇我」を氏の名とする氏族。姓は臣（おみ）。古墳時代から飛鳥時代（6世紀-7世紀前半）に勢力を持ち、代々大臣（おおおみ）を出していた有力豪族である。（中略）蘇我氏は大化の改新（乙巳の変645年）にて滅びた、と認識されることが多い。

解説：出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

「神庭荒神谷遺跡（かんばこうじんだにいせき：右上の図）では、1984年～1985年（昭和59-昭和60年）の2か年の発掘調査で、銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本が出土した。



また加茂岩倉遺跡（かもいわくらいせき：右下の図）では、1996年（平成8年）より1997年（平成9年）の2年間にわたり、加茂町教育委員会と島根県教育委員会により発掘調査が行われ、加茂岩倉遺跡出土の銅鐸（国宝、島根県立古代出雲歴史博物館展示）発掘の結果、一か所からの出土例としては日本最多となる39口の銅鐸が発見された。



更に鐸の種類を調べると、

1、鐸（鐸サナキは、中に「舌(ゼツ)」がぶら下がっていてこれで叩く。お寺の堂塔の隅に下がる「風鐸」も同じものです。）

2、木鐸

- ①舌（振子）を木で作った金属製の鈴。昔中国で法令などを人民に触れて歩くときにならしたものだ。金口木舌。
- ②（転じて）世人に警告を發し教え導く人。「社会の一」「世の一として立たん／復活魯庵」)

3、銅鐸（弥生(やよい)時代に作られた、釣鐘形の青銅器。祭りに用いたといわれる。記紀などの古書には銅鐸の記録は全くなく、銅鐸がいつ頃から鑄造されるようになったかについては諸説があるだけである。)

4、鉄鐸は、『先代旧事本紀』と『古語拾遺』が記す「天岩屋戸」条に、天岩屋戸に籠った天照大神を招きだすために、天目一箇神（あまのめひとつかみ）が種々の刀・斧・鐵鐸（古くは佐那伎〔さなぎ〕と言う）を作ったとある。

この時の鉄鐸が鑄造か鍛造(たんそう)か、製法は分からない。

そして天鈿壳（あめのうずめ）が、鉄鐸を付けた矛を手に持って樽の上で踊ったとあることから、往時は矛や杖などの器具に音を出す飾りとして使用したと思われる。

なお、鉄鐸は古墳時代まで見られ、その時代の鉄鐸は、扇形、あるいは台形に裁断した鉄板を丸めるように両端を合わせて鐸身としており、鍛造で作ったとみられる（早野浩二「古墳時代の鉄鐸について」研究紀要 第9号 2008年 Web）（右図）。)



また、240年に倭国を訪れた魏使は、邪馬台国や伊都国など北部九州の国々を探索し、鉄鏃や銅矛を検出しているが（『魏志倭人伝』）、鉄鐸や銅鐸の祖型とされる小銅鐸は見かけなかったようである。

なお、藤森栄一著「銅鐸」学生社刊(s39.8.5 初版)によれば、いま国内の古社で鉄鐸を蔵するもの、諏訪神社上社、小野神社、上伊那郡小野村矢彦神社である。諏訪神社には、現在六口ずつ三組あり、形状・大きさは大同小異である。（左図）



社伝によると往古神使の巡回に使用した宝鐸で、室町時代には、これを打ちならして誓約の証とした記録がある。古来の神宝中でも、特別な位置を占めた重宝である。

製作の時期については、資料及びそれ自体に記録がないのでわからないが、相当年代までさかのぼり売ることとは否定できない。

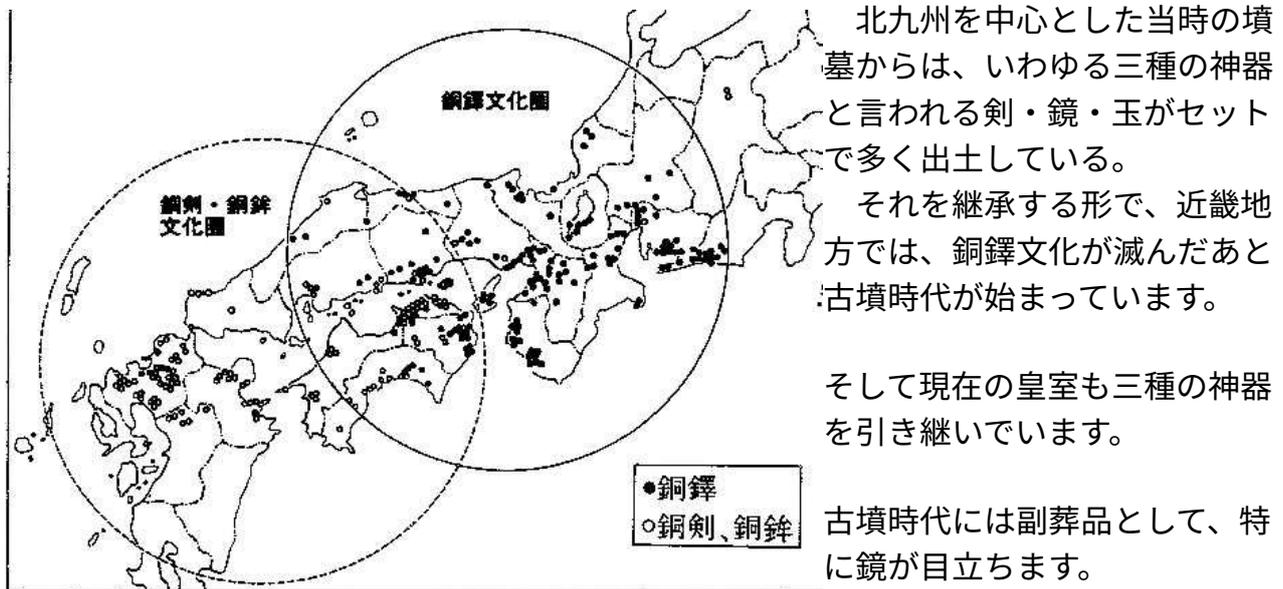
諏訪大明神画詞には、「大鈴ノゴトシ」とあり池原香穉のみともの数には「さなぎの鈴」と記しており、神社では宝鈴とよんでいる。
古典にいう佐奈伎がこれにあたるのだろう。(以上 藤森栄一著「銅鐸」より引用。)

さて2・3世紀の日本は、銅剣銅鉞文化圏と銅鐸文化圏に大きく分かれていたとして、学校の歴史の時間に習ったことがあると思います。(文化圏については後述します。)

ところが、西暦300年頃、近畿圏を中心とした銅鐸文化が突然消滅して、以後前方後円墳を中心とした古墳時代に移行したと考えられています。

解説：古墳時代は、古代日本で、古墳が盛んにつくられた時代。弥生時代に続き、3世紀末ごろから7世紀ごろまで。階級社会が成立し、特に大和政権を中心とする政治権力が強まった。出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

これは一体、何を意味しているのでしょうか。



このことは、素直に考えれば、300年頃、九州勢力の一部が東征して銅鐸文化を滅ぼし、古墳時代を始めたと考えられる事もできるのです。

古事記や日本書紀に記されている神武天皇の東征は、この時のことがモデルになったとも云われています。

そうすると、この西暦300年頃というのは、日本古代史上、最も重要な革新的な時期だったといえると思います。その少し前までは、九州では邪馬壹(台)国の女王・壹与が倭国を統治していたと考えられるのです。

では、この銅剣銅鉾文化圏と銅鐸文化圏とは何を指しているのでしょうか。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

かつては遺跡が発掘されること自体が少なく、青銅器の出土量も少なかったため、銅矛は主に北九州周辺、銅鐸は近畿から東海地方にかけての地域で出土するという偏りがあった。そしてこの偏りが絶対であったうちは中京以西の列島を二分する「銅鐸文化圏」と「銅矛文化圏」の存在によるものであると捉えられ、仮定としてではなく真剣に論じられていた時代があった。(さらに中国地方を「銅剣文化圏」としてこれを加え、三つの文化圏が対立しあっていたとする説もあった。)

しかし、発掘される遺跡の増加に伴い当然のことながら青銅器の出土例も増え、「銅鐸文化圏」の地域で銅矛や銅剣が、「銅矛文化圏」内で銅鐸が出土するといったことが多くなった。特に佐賀県の吉野ヶ里遺跡からは銅鐸の鋳型と銅鐸が出土した。また出土した銅鐸が島根県の福田型銅鐸と酷似しており、同じ鋳型で吉野ヶ里で生産された銅鐸が島根県まで移出された可能性が高くなった。さらに福岡県、大分県などでも多数の銅鐸や鋳型が出土している。

このため、「銅鐸文化圏」と「銅矛文化圏」という言葉は論じられることがなくなり、小学校の教科書からも記述が削除されている。

一方三輪氏や賀茂氏などの地祇系氏族との関連は以前より指摘されており、出土分布が島根県(大国主神など出雲神話の舞台)、兵庫県(播磨国風土記など出雲系神話の舞台)、徳島県(天八現津彦命の後裔が定住)、高知県(天八現津彦命の後裔が定住)、奈良県(事代主神など三輪氏の本拠)、滋賀県(和邇氏一派や三上氏の本拠)、長野県(建御名方神の後裔が定住)であるように、三輪氏系部族と物部氏系部族の政治連合体において象徴的に用いられたとする説もある。これらは神武東征の影響によって崩壊し、畿内の中心地域から弥生時代後期に銅鐸が消えたとされる。『ウィキペディア (Wikipedia) 』

さらに銅鐸研究の状況について、森浩一氏によりますと

解説: 森 浩一 (もり こういち、1928年7月17日 - 2013年8月6日) は、日本の考古学者。同志社大学名誉教授。専門は日本考古学、日本文化史学。従姉妹に随筆家でイタリア文学者の須賀敦子がいる。

1. 銅鐸の分布については、銅鐸は長い間近畿地方を中心に分布していたと言われていましたけれども、昭和54年佐賀県の鳥栖、安永田遺跡(やすながたいせき)で鋳型が出土しました。この鋳型が今のところ一番古いものです。

一番古い銅鐸の中のちょうど中頃くらいです。小型銅鐸です。

小型銅鐸を前後の時期に分けますと、それは後の時期の方で、最古に近い銅鐸といってもいいでしょう。近畿地方にはそのような銅鐸はかけらもない時代です。

その後鳥栖では別の遺跡からも古い銅鐸の鋳型が出ました。

その模様が加茂岩倉遺跡で見つかった一番見事な海亀が泳いでいる絵が書いてある銅鐸（10号銅鐸：右図）と共通する部分があります。すごい銅鐸です。2ミリで仕上がっているもので、佐賀県の鳥栖の本行（ほんぎょう）遺跡から出ました。したがって出雲の銅鐸にも九州の影響が入っているのです。



このように今は九州を入れないと銅鐸の系譜は語れなくなってきています。

高校の教科書では従来近畿を中心に丸をうって銅鐸文化圏、九州を中心に丸をうって銅剣・銅矛文化圏と紹介されてきましたが、あれは古くなってきてしまいました。

銅剣はご承知のとおり島根県の荒神谷遺跡1箇所です。358本出ています。今まで日本で出土された銅剣の数より多くなりました。従来の教科書の分布図は何の役にもたなくなりました。分布というのはこのように遺物が発見されることによって変わってきます。

関東にも若干小型銅鐸は出ますし、東京都内にも出始めました。数年前に高田馬場から出ています。だから関東も今や銅鐸文化圏の中で語らなければいけなくなりました。栃木県小山や群馬県からも出ています。神奈川県にも出ていますし、千葉県は4つぐらい出ています。そのうちに東北にも出土するのではないかという雰囲気もあります。分布は以前とは大きく変わってきています。

解説：小銅鐸は全国的にも千葉県での出土例が最も多く、千葉県を代表する遺物の一つとなっているが、鱗（ひれ＝体部の側面に付く板状の部分）をもち、大型の銅鐸を忠実に模した形状のものと、鈕（ちゅう＝上の環状の部分）の断面が丸く鱗が省略された形状のものがある。前者は弥生時代後期の遺構から、後者は古墳時代初頭の遺構から出土することが多い。



文脇遺跡（袖ヶ浦市野里）の小銅鐸（上図）は、高さ10.8cm、最大幅5.8cm、重量124gあり、鱗をもたないタイプとしては比較的大きい。文脇遺跡14号土壌出土一括遺物（ふみわきいせきじゅうようごうどころしゅつどいっかついぶつ）

2. 銅鐸の出土状態について、銅鐸というものはお百姓さんが開墾中に見つけて、学者がかけつけたら警察署に置いてあるというのがだいたいのパターンだったのです。ところが、ちょっとおとぎ話みたいな話をしますが、大阪の箕面（みのお）である人が犬を連れて山の中を歩いていました。

そうすると犬がワンワンと鳴きました。

ふっと鳴いているところを見たら銅鐸の鰭（ひれ）の部分が見えていました。

それでそのおじさんがその辺に落ちている木の枝で掘り出しました。

それで穴もしっかり残っていたのです。

その穴はなんと横倒しに向いていました。

横倒しに埋まる穴を掘って、多分楽器の入れ物のような木製の入れ物に入れて埋めたのでしょ

う。博物館にある開墾中に出た銅鐸もだいたい横の所に鍬（くわ）が当たっているのです。

横のどこかにガチーンと最初の鍬が当たっています。

このことは博物館で気をつけて見て下さい。

だから大部分の銅鐸は横向きに埋められているのです。現在20ほどこの埋め方で見つ

かっています。全国的にたとえ邪馬台国の場所がどこであろうと、そのようなこととは無関係に弥生時代の日本列島は銅鐸の埋め方にひとつの決まりというか、流行があります。



八王子銅鐸の出土状況 南から

ただその例外がひとつ出土しました。

それはこの愛知県の一宮市の八王子遺跡です。

これはもう新聞に発表されたのですが、一宮の銅鐸は全国唯一例外です。（左図）

これは、鈕（ちゅう）を下にして埋めてあります。

変な埋め方です。

縦の穴を掘って銅鐸を逆に埋めています。今までそのような埋め方で出土しているものはありません。しかも一宮の銅鐸

は何か土がいっぱいこびりついているそうです。

これは愛知県で出ている銅鐸の中で一番古そうな銅鐸だと聞いています。倒立状態で埋められたのが、どういう意味なのかまだわかりません。

それから先ほど言いました、愛知県最大の遺跡である朝日遺跡から銅鐸（下図）が見つっていますが、それはやはり横向きで皆さんで言うと脇腹を下にして埋めてあります。

脇腹を下にしてじっと立つことは出来ないからやはり入れ物に入れたのでしょう。鰭（ひれ）を上と下に向けて埋めてあります。

これがひとつの法則です。

この法則はここ20年でわかってきました。

最初にわかったのは先程の箕面（みのお）の銅鐸です。



朝日銅鐸出土状況

それからもうひとつの出土状態は、意外なことなのですが、数十から百ぐらいに木っ端みじんになった銅鐸で出てきます。

これがわかりかけたのは20年ほど前からです。

銅鐸を木っ端みじんに割ってあり、小指の先くらいの大きさになっています。中には弥生時代の人が歩いてちょっと触って落ちたのではないかと思う方もいるかもしれませんが、銅鐸というのはちょっとひっくり返ったくらいでは壊れません。だから猛烈な力でやらないと破碎した銅鐸はできないのです。時々破碎した銅鐸で、ねじ曲がってでるものもあります。

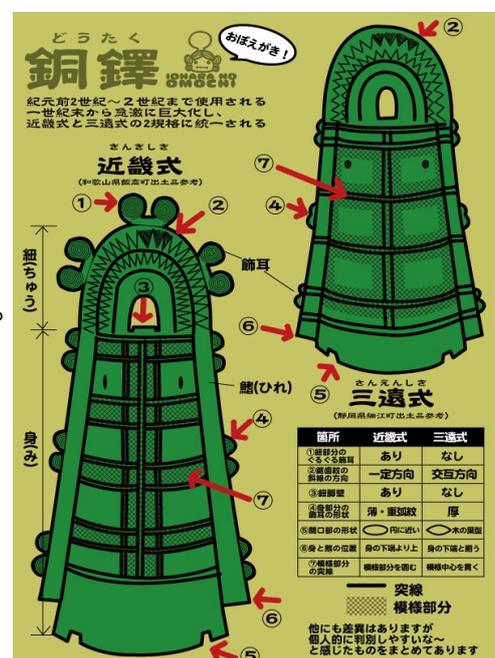
大阪の池上曾根遺跡の銅鐸は、ゆがんでいますが、あれは猛烈な力で明らかに意識的にねじ曲げたのです。銅鐸を火で熱して急に水をかけたら割れるという人もいますけれども、まだ実証されていません。私は銅鐸を割っているように思います。ただし木っ端みじんに割っているのはおよそ弥生時代の終わり頃です。

銅鐸のなくなってしまう時期とほぼ一致しているように思います。だから銅鐸の最後は意図的に何かやったのではないのでしょうか。ひょっとしたら邪馬台国が九州から近畿に動いてきたのかも知れません。そして、銅鐸を持っている人々の信仰が一気に終わりになったのかも知れません。あるいはそのような事件でなければ、銅鐸のお祭りに対して新しい前方後円墳に代表されるような信仰が出てきて今までの物を抹殺したのかも知れません。

それだけならば地下に埋めておいたらこと足するのに、何故割らなければいけないのでしょうか。割った銅鐸の中で大和から一番遠いのは沼津で出ています。沼津の銅鐸は割ってあるけれども、割って捨てたものとは少し違うのです。沼津の銅鐸は飾り耳を割ってからペンダントに転用をしています。愛知県でもそのような銅鐸がひとつ出ていたと思います。つまり割った銅鐸には割っても粉々にして捨ててある銅鐸と、割った破片をペンダントに転用する銅鐸の2種類があります。

愛知県は尾張の国と三河の国からなっています。尾張の国の方では、いくつか銅鐸が出ていますが、不思議なことは江戸時代とそれから明治、大正に出た銅鐸がほとんどです。それ以外では先ほどの朝日遺跡とか、一宮の銅鐸とかぐらいで、戦後には銅鐸は出ていません。

一方、三河が最後の段階の銅鐸の中心になるのです。三遠式銅鐸という銅鐸で、三河・遠江（とうとうみ）で流行する1メートル前後の大型銅鐸です。この銅鐸はだいたいその地域内で作られたと推定されています。だから三河は弥生後期の頃、最後の銅鐸の製作の非常に盛んな地だったのです。



奈良県ではその頃ぼつぼつ銅鐸の風習は止んでいます。銅鐸の最後の頃には三河遠江の辺りだろうそくの火が消える直前にウワーと燃えるように盛んに作られていました。そして、急に銅鐸はなくなっているのです。この銅鐸のたどる運命は同時に日本の古代国家の成立の裏表のようになっているのでしょうか。銅鐸の消滅から国家の発生を誰が上手に解くことができるのでしょうか。

3. 最後に銅鐸の用途について少しお話しておきます。

第一に、銅鐸は日常の物ではないのです。

つまり家庭用品ではありません。銅鐸は特殊なものであるということがまず大前提です。

2番目は、銅鐸を鏡のように副葬品として故人の墓には入れません。

銅鐸の中で現在確実に墓に入った例は小銅鐸以外ありません。

模様のない小銅鐸は九州や千葉県でいくつか墓に入ったものがありますが、普通の銅鐸は墓には入れてありません。

奈良県でひとつだけ墓に入った銅鐸があると言う人がいますが、私が発掘現場を見たかぎりにおいて墓に入っていたというには少し無理があります。

だから今のところ、銅鐸を墓には入れないと考えられています。

それから古い小型の銅鐸ほどいい音がします。ただし1メートルくらいの銅鐸が全くいい音がしないというわけではありません。

実は1メートルくらいの大きい銅鐸ほど実験をすると釣鐘で言うと余韻が残るのです。

だから古い小型の銅鐸はいい音がするけれども、ボワンと消えてしまいます。

1メートルくらいの銅鐸は叩くと釣鐘の余韻のようにウーウーと残っています。

榎原考古学研究所の紀要にその実験データが載っています。

だから大きい銅鐸は見るだけだと強弁している学者がいますが、それは違うと思います。

大きな銅鐸が鳴らないという説が出たのは、次のようなわけです。

この愛知県や静岡県にある大きな銅鐸は一番てっぺんに飾りがついています。

だからこの大きな銅鐸をぶら下げることができないと思い込んだのでしょう。

ロープでつるす時に邪魔になるからです。

だから銅鐸を置いて見るのだという説が出たのです。



ところが昭和20年代に戦争に負けて優秀な考古学者榎本亀次郎という人が朝鮮から日本へ帰ってきて、奈良の博物館におられました。

ある日ふっと榎本氏が倉庫から銅鐸を持ち出してきました。

その銅鐸にはV字型にひもつれがありました。

1本真っ直ぐつるのではなくて、V字型に両方からついたら飾り耳があっても何も邪魔にならないのです。

今度出た加茂岩倉遺跡の海亀が泳いでいる絵も、鈕（ちゅう）の中央の下部に書いてあります。

もし1本真っ直ぐにロープをかけたら海亀が泳いでいる所は隠れてしまいます。

榎本さんの解釈では、銅鐸というのは毎日ぶら下げているのではなくて、お祭りの時だけとかあるいは10年に1回の重要な時とかに、しかも粗紐ではなくておそらく柔らかい幅のある布のような物でV字型にそっとぶら下げたのではないかと思われれます。

だから、そんなにひどい擦り目というのは出ないと言うわけです。

いずれにしても銅鐸には最初から最後まで見る要素と聞く要素の両方あるのです。

音の要素についていえば、単に鳴るだけではなくて、大きくなって余韻が響くようになったのです。

終わりに愛知県の朝日遺跡からは単に銅鐸の実物が出ているだけではなくて、朝日遺跡では鋳型まで出ています。だから朝日遺跡は銅鐸を作っていた場所としても現在、候補地になっています。また一宮市の八王子遺跡では、全国ではじめて銅鐸が倒立状態で出土しました。それに三河では三遠式銅鐸も出土しています。

このようなわけで愛知県は銅鐸研究にとってさまざま恵まれた土地と言えます。

さらに古田武彦氏の講演記録を紹介します。

内容：（銅鐸王朝、拘奴こうぬ国）について、

魏志倭人伝の中の「拘奴国」がある。これは、どこでしょうか。このように聞かれた。

わたしは、それは『魏志倭人伝』については分かりませんとお答えしました。

つまり「奴国」が二度出ますが、二回目の「奴国」が倭国の境界の国にあり、その南に「拘奴国」がある。このように書いてある。

しかし女王国がどのように広がっているか分からないから、端の南と言われても把握の仕様がなない。

初めは九州熊本辺りであると九州説の人に強かったですから、そのように感じたこともありチラッと書いたこともありますが、『「邪馬台国」はなかった』でも触れている程度で根拠も特に論証もなかった。

それで今のような『魏志倭人伝』からでは分かりません、そのような結論になった。

ところが質問に応じてお答えしているうちに、待ってください、お答えできるかも知れません。そのように言いました。

『後漢書』倭伝 に

「自女王國東海度千餘里至拘奴國雖皆倭種而不屬女王」とあります。

なぜなら『後漢書』倭伝には「拘奴国」に関する新しい情報がある。

拘奴国は女王国の東にある。千里のところにある。このように書いてある。

これはわたしは『魏志倭人伝』でも（短里の）「千里」があり、これは関門海峡付近である。

それから又東へ千里倭種の国がある。

それと同じように九州の東岸部で千里。

それから東の瀬戸内海のどこかにあると感じた。

それで香川県を探し回ったこともあるが、結局のところ分からなかった。

ところが、ご質問を受けて、待ってくださいよ。

『後漢書』は、漢代の史料で書いてある。もちろん『「邪馬台国」はなかった』で書きましたように、著者の范曄（はんよう）はかなり自分の判断で書き換えているところもある。

たとえば「会稽東冶かいけいとうち」を「会稽東冶かいけいとうや」と書き直したり、卑弥呼の前に男王が七・八十年居た。これは二倍年暦だと思うのですが、それを二倍年暦だと気が付かず七・八十年戦乱が続いたと解釈して、「倭国大乱」という言葉を新しく造った。これらは誤解だと思う。これらについては何回も論じてきました。

このように范曄には、判断ミスが各所にある。そういう目で『後漢書』倭伝を見ていましたが、それでは『後漢書』倭伝が全部インチキかということ、そうではない。

漢代の史料をそのまま使ったものもある。

たとえば有名な志賀島の金印の記事。

この有名な記事は、『三国志』魏志倭人伝にはない。それが明確に書いてある。

あの記事は、漢代の史料によって書いてある。だから正しかったわけです。

志賀島から実物の金印が出てきたのは、その証拠である。

『古事記』『日本書紀』には金印のことが書いていないのは、大事なことをカットしている証拠になる。その点では『後漢書』倭伝は、正しい貴重な史料を挿入していた。

そのように考えてきますと「拘奴国」の記事も、魏志倭人伝を改訂したら東千余里になることはない。そうすると漢代の独自史料を手に入れて、それにより書いた。

『後漢書』ですから、ほとんど漢代の史料なのは当たり前ですが。

それと同様志賀島の金印のような漢代の史料で書いたのではないか。

そのように、わたしは電話でお答えしながら気がついた。

そうすると違ってきます。長里と短里があって、漢代は長里、魏の六倍の距離。

短里は周代と、魏・西晋で、間の秦と前漢・後漢が長里。東晋以後が長里。

これは何回もわたしが論じていることです。

後漢は間違いなく長里です。するとこれは瀬戸内海ぐらいに納まらない。近畿地方に入る。

そうしますと大阪府茨木市東奈良遺跡を囲む銅鐸圏に入って来るかもしれない。

「まさか！」と電話の向こう側で、言われたのを覚えています。

電話を切りましたが、やはり論理的にはそのように考えざるをえない。

それで「拘奴こうぬ国」と大阪府交野（かたの）市の交野（こうの）山が関係しているのか。籠（この）神社も「奴国」に関係しているのか。そういうことを追求していた。（資料編 魏志倭人伝の全貌（ぜんぼう）を参照のこと。）

解説：東奈良遺跡には、二重の環濠の内部に高床式倉庫など大型建物や多数の住居があり、外部には広大な墓域もあった。発見された工房跡から、銅鐸の鋳型が35点も出土しており、ほかにも銅戈（どうほこ）・勾玉（まがたま）などの鋳型が発掘されている。ここの鋳型で生産された銅鐸が、近畿一円から四国でも発見されている。

この集落が、奈良県の唐古・鍵遺跡と並ぶ日本最大級の銅鐸工場、銅製品工場であり、弥生時代の日本の数多くの「クニ」の中でも、各地に銅鐸を配布することができるほど政治的に重要な位置を占めていたことがうかがえる。

また、高さが14.2センチの小さな銅鐸が見つまっている。銅鐸の起源は解明されていないが、この銅鐸がその謎を解く鍵となる可能性もあるという。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

ところが最近わたしにとって大発見があった。
たとえば楠木正成をご存知ない人がいる。
わたしなどには百も承知の人物ですが、若い人は知らないわけです。
ところが聞かれているうちに、エッと思ったわけです。
驚くことには楠木正成は天皇の敵なのです。
わたしは、そんなことは思ったことはない。
皆さんも、そんなことを思いますか。
わたしなどは天皇に忠節を尽くした人物と思い込んでいた。戦争中の教育で。

しかしそうではない。
今の天皇は北朝系です。
楠木正成は南朝系です。
北朝と戦った人物のほうです。
ですから北朝系の天皇から見れば、楠木正成は敵なのです。
言ってみればその通りで、それ以外にない。
ですが、そのような考えは、わたしの頭にはなかった。
天皇の無二の忠実の家来かのように、戦争中は教え込まれた。
教育というものは恐ろしいものです。
そんなことをやり取りしながら、エッと思ってきた。

これも余計なことですが、ついでに言います。
昭和天皇の敗戦の時の談話、それを岩波新書や中公新書で読んでびっくりした。
なぜ昭和天皇は敗戦を決意したか。
それは日本の制空権をアメリカに握られて、伊勢神宮も熱田神宮もその下にある。

いつアメリカ軍が伊勢神宮の鏡や熱田神宮の剣を奪うかもしれない。

わたしは北朝の身である。

(わたしは昭和天皇がそういう台詞(せりふ)を言うとは思いませんでした。)

三種の神器がなければ天皇で居ることは出来ない。だから降伏を決意した。

わたしは敗戦の時(一九四五年)一九歳だったから、歴史は現代史だから知っているとはかきかっていた。新聞はそのようなことを書かなかった。

「やむなく民を思って、・・・」、新聞もラジオも、全てそういう記事ばかりだった。

しかし御本人が白状している。

「自分は北朝の出であるから、三種の神器を奪われなくなかった。だから降伏した。」と、ちゃんと喋っている。書かれている。

何か「北朝の出身」とは歴史的なことで、現実のこととは思っていなかった。

ところが昭和天皇には現実だった。

これも経過を言えば長くなるが、短絡して言うと乃木将軍は山鹿素行の『中朝事實ちゅうちょうじじつ』という本を非常に尊重していた。

これは長州吉田松陰がはじめた松下村塾系統の教育です。

『中朝事實』を全部書き写して、それを昭和天皇に差し出した。

乃木希典は学習院の院長だった。昭和天皇は学習院の生徒です。

その少し後自決している。

わたし乃木が死んでも、この『中朝事實』をご覧戴ければ大丈夫です。

そういう姿勢だった。

わたしはこの『中朝事實』(山鹿素行全集思想篇 第十三卷)を読んでいなくて、読み下しはあったけれども漢文がなくて、この間京大に行って手に入れて読んで分かりました。何が分かったか。

結局『中朝事實』というのは、天地開闢から始まり、多くは天孫降臨を書いて、三種の神器もたくさん書かれて仁徳天皇までで終わっている。

解説：『中朝事實』は、山鹿素行が記した尊王思想の歴史書。寛文9年に著わした。全2巻。付録1巻。山鹿素行は儒学と軍学の大家である。出典：ウィキペディア

これは何かといいますと、皆さん良くご存知なのは北畠親房が『神皇正統記』で、「三種の神器」について南朝の正当性を説いた。これは有名な話です。

これは北畠親房が南朝に「三種の神器」があるから、南朝が正統であることを『神皇正統記』で主張した。

そして同じく山鹿素行は「三種の神器」を理由にして、江戸時代は北朝系の天皇で南朝は滅んだから、現在(江戸時代)の天皇が正統の天皇だと言おうとした。

よく言われているように『神皇正統記』では、南朝の天皇は○○天皇、北朝の天皇は○○院と書かれている。

北朝の天皇は、「院」扱いされていて天皇ではない。
南朝が存在した時は、南朝が正統の天皇です。
北朝の天皇は「三種の神器」を渡されてから、正統の天皇となった。
このように理解されている。

だから山鹿素行は、天皇は天孫降臨以来連綿と一貫している。万世一系である。
朱子学の立場で彼は大義名分論を学んできた。
それを日本に当てはめて、日本の大義名分論で「三種の神器」を持った万世一系に忠節を
尽くすべきだ。このようなことを説いた。
それが吉田松陰に影響し、また乃木希典に影響して昭和天皇にも影響した。
このようになっている。『中朝事實』を読んで、そのことがよく分かった。

そこで、わたしは考えた。
なるほど「三種の神器」は、そういう意味で大義名分の道具でありシンボルだ。
そうしますと『古事記』『日本書紀』は、何回もあれほどくどくど「三種の神器」のことに
触れているのか。

あれほど「一書に曰く」と出てくる。
今は熱田神宮にあるとか、伊勢にあるとか、何回も書いてある。
あれだけくどく書くのはなぜだ。こう考えた。そうすると初めて分かってきました。

なぜなら『古事記』『日本書紀』の一番の不思議は、「銅鐸」の記事がないことです。

かれらはうっかりミスで銅鐸の存在を知らなかったか。そんなことはあり得ないことです。
今出ている銅鐸だけでも三〇〇を超えている。
わたしや森浩一さんが言っている公式に、「一つ出たら、その五倍・一〇倍の実物があつ
たと考えなければならない。」がある。
出てきたものが全てであると、考えてはいけない。

わたしが大阪の朝日カルチャセンターで言ったら、直ぐ後で森浩一さんが書いたので、わ
たしと森さんの公式であると言っていますが、常識的に考えてもそうです。
三〇〇個の五倍あつたとして一五〇〇、十倍あつたとて三〇〇〇個あつたことになる。
狭い日本の近畿日本の中にこれだけあつて、誰も気が付かなかつたということがあり得ま
すか。わたしはそんなことは、あり得ないと思う。

また「三種の神器」そのものを考えてみても、たいへんリアルである。九州福岡県吉武
高木遺跡、須久岡本遺跡などに見事な実物の「三種の神器」が出てきています。
ですから「三種の神器」は空想の産物ではない。

そうすると、これだけ「三種の神器」の記事を書きながら、「銅鐸」の記事がないのは、
銅鐸を意識しなかつたのではなくて、銅鐸を意識しすぎたからである。

「右図は、三種の神器出土地と吉武高木遺跡3号木棺墓から出土した三種の神器」

三種の神器出土地

No	遺跡名	所在
①	吉武高木	福岡市西区
②	三雲南小路	福岡県糸島市
③	井原	福岡県糸島市
④	須玖岡本	福岡県春日市
⑤	平原	福岡県糸島市

乃木將軍の自決、その理由が実は、乃木將軍の遺書の先頭に書かれてある。
これは西南の役の時に軍旗を失った。その責任を取って死ぬ。

これが最初に書いてある。
後は長い、家は誰にやるとか、・・・最後は眼鏡は誰にやるとかまで書いてある。
こまごまと書いてある神経の細かい人である。
ところが死ぬ理由は最初は「西南の役」のことしか書いていない。
後世の歴史家が研究すれば、乃木將軍が日露戦争に参加したというのは嘘である。
二〇三高地のことは、まったく遺書に出ていない。
こういう研究をする人が出てきてもおかしくはないくらいです。



この話は、嘘ではありません。
遺書は活字本にもなっています。写真版の実物大も見ましたけれども、その通りなのです。

これは何か。もちろん乃木將軍が一番責任を感じていたのは、日露戦争の旅順の「二〇三高地」に決まっています。
日本の若い青年だけでなくロシア側を含んだ青年をおびたたく殺した。
その責任を痛感していることが、彼の漢詩でも出ている。

ところが、そのことは一切出てきていない。
たくさんの青年を殺した責任のことは、一切書いていない。
なぜか。それを書く自分だけで終わらない。
児玉源太郎、山県有朋も出てくるだろうし、最後は明治天皇の責任に行きます。
おそらくあの時こうしていたら、この時こうしていたらと考えることは、そのようなことを書けばいくらでもある。
だから、このことは、いっさい書かなかった。
この一切書かなかった「たくさんの青年を殺した責任」を、当時の乃木將軍は「二〇三高地の乃木」なのです。
ですから「沈黙の批判」と言っていますが。
つまり書かないことが重大な意味をもつ。

同じく『古事記』『日本書紀』が銅鐸に対し、いっさい書かなかったことに重大な意味がある。

これから先は失礼な言い方だと言って、怒る人が居るかもしれないが、ざっくばらんに言わせていただきます。

「三種の神器」というものはチャチなものです。
玉は縄文時代から、いくらでもある。剣は権力者で持たない人物をいない。
鏡は中国に注文して一〇〇枚手に入れた。中国では日常品レベルの品物です。
日本でも後に作れるけれども。それを寄せ集めて「三種の神器」と言っているだけです。

これに対して銅鐸は立派なものです。
燦然（さんぜん）たる輝きを放ち、存在感がある。
これの元は出雲で、その大元の祭祀の道具は、中国の陶（とう）です。
弥生の土笛として出土しているのは東は舞鶴、西は大島、そこまで広がっています。
楽器でありシンボルの土器です。
ところが金属器の時代になり、銅鐸という楽器、それを祭祀のシンボルにしていた。

その国を倭国は「国譲り」と称して、国を乗っ取ってしまった。
だから出雲に準ずる勢力圏をもっていた近畿の銅鐸圏の勢力は、これに対して非常に不満を持っていた。
だから銅鐸国家は、九州王朝と共に天を戴かざる敵対関係にあった。
それをまた神武が熊野から超えて大和に入り込んだ。そういう状況なわけです。

そうしますと、「三種の神器」をあれだけ書いた本当の背景は「銅鐸」にある。
このテーマです。今ごろ気が付くのは、遅いのですがやっと気が付いた。
もちろん近畿天皇家の場合は、八世紀になってからそれにプラスします。
ハッキリ言えば近畿天皇家の場合は、九州王朝から「三種の神器」をもらっては、いなか
かった。だから「三種の神器」を受け継いでいると言うために、熱田神宮や伊勢神宮を持
ち出したりして、くどいほど記事を出している。

くどく書いているのは、「三種の神器」を持っていない証拠である。
それを大義名分のために、『古事記』『日本書紀』で、くどく書いている。

『中朝事實』に書いてあるように「三種の神器」には役割がある。
山鹿素行は万世一系の証明に使った。
『古事記』『日本書紀』も、いたずらにおもしろがって「三種の神器」を書いているの
ではない。

『古事記』『日本書紀』を前半と後半に分けますと、最初九州王朝の前半には、「三種の
神器」を書く理由があった。銅鐸王朝（拘奴国）に対して、九州王朝側は遅れています。
天孫降臨以後（弥生中期以後）ですから。我々のほうが正統だよ。
そのように言おうとして「三種の神器」を持ち出したのが九州王朝。

それを受け継いで、我々のほうにもあるよ。
熱田神宮や伊勢神宮を持ち出したのが近畿天皇家。
そのような関係であることが分かった。

銅鐸がないことが問題だということは、わたしも何回か書いています。
しかし門前の問題意識のみに止まっていて、その本当の意味をいままで知らなかった。
この「沈黙の証拠」とも言うべき論証と、先ほどの『後漢書』倭伝を長里によって考えるという結論が一致した。

そうすると偶然結論が一致したということは考えられない。
やはり『後漢書』倭伝の「拘奴国」は銅鐸国家である。
それは九州王朝よりさらに淵源の古い輝ける王朝の人々であった。
これに対し九州王朝は引け目を持っていた。

国譲りという篡奪（さんだつ）を行なった。

この篡奪に引け目を持っていたから、それで「三種の神器」という寄せ集めで誤魔化すとか、自分たち新興勢力の正当化に使った。

これも同じことを言いますが、これは近畿天皇家に賛成であるとか、反対であるということではない。ましては九州王朝に味方するとか、あるいは手を課すとか、また正当化を批判することでもない。
そのようなことではなくて、あくまで歴史の事実として見た場合、そのように考えざるを得ない。そのことに気が付いた訳です。

解説：国譲りという篡奪（さんだつ）については、「六月晦大祓祝詞（ミナズキのツゴモリのオオハラへのノリト）」に、「大祓祝詞」ではらう罪がたくさんと書いてあります。これをみると、その罪に二種類あって、「天つ罪」と「国つ罪」と二つに分けて書いてあります。」つまり、「大祓祝詞」で、「天孫降臨のとき」犯した罪をはらうことができるとしています。是非ともご覧ください。

(了)

資料編： 魏志倭人伝の全貌（ぜんぼう）

ここに『魏志倭人伝』と『後漢書』を示します。

◎『魏志倭人伝』

南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戸南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月

官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳 {革是} 可七萬餘戸

自女王國以北其戸數道里可得略載其餘旁國遠絶不可得詳

次有斯馬國次有巴百支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有鬼國次有爲吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國次有支惟國次有烏奴國次有奴國此女王境界所盡

其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王自郡至女王國萬二千餘里

◎『後漢書』倭伝

自女王國東海度千餘里至狗奴國雖皆倭種而不屬女王

これも、経緯を言いますと、先ほど述べた松山の合田さんからお電話がありまして、狗奴国についてお話ししている中で、わたし自身も、思いもかけない答えが出てきて驚き、合田さんも驚いたという一幕がありました。

狗（=拘）奴国については、『魏志倭人伝』では、よく分からないのですが（狗と拘は同じと考える）。

次に奴國有り。此れは、女王境界の盡くる所。 其の南に狗奴國有り。男子を王と爲す。其の官に狗古智卑狗有り。女王に屬さず

ここに書かれてある奴国のことは、たいへん有名です。この奴国はなぜ有名かと言いますと二回出てくるからです。そのことは研究史上ではだれでも知っていますが、一番知っていたのは、『魏志倭人伝』の作者の陳寿です。ですから陳寿は、この二つの奴国を区別しています。初めに出てくる奴国は、女王国の近くです。こんどの奴国は違います。女王国の領域の一番端にある奴国です。前の奴国とは別です。このように分かり切ったことをなぜ今まで分からなかったのか。これについて同じ奴国と考えて、円周上に並んでいるなど、いろいろ説明している人もいますし、わたしも今まで分からなかった。今度読んでみますと、同名だけど地理的にまったく別の国であると、陳寿は説明しています。

それで問題の狗奴国ですが、その奴国の南にあります。ところが「女王境界」とありますが、どのあたりか分からないから狗奴国が分からなかった。

加えて、もう一度「狗奴國」が出てきます。

『魏志』倭人伝 部分

その八年太守王[斤頁]（おうき）官に到る。倭女王卑彌呼（ひみか）、狗邪國の男王卑彌弓呼と素より、和せず。倭の與載斯烏越等を遣して、郡に詣り、相攻撃する状を説く。

塞曹掾史（さいそうえんし）張政（ちょうせい）等を遣わし、因って詔書・黄幢を齎（もたら）し、難升米に假拜せしめ、檄を爲りて、これを告諭す。

その狗奴国と倭国は相攻撃する状態になり、中国が使者を派遣して攻撃させないように、今アメリカが中近東に使者を派遣しているのと同じように、そういうイメージのある文章がある。ですから邪馬壹国とは、仲が悪いという大変深い関係にある。しかも中国が仲裁に来るほど、仲が悪い。そこまでは分かるのですが、かんじんの狗奴国がどこにあるかは分からない。

これが分かるのが、『後漢書』倭伝です。これは『魏志倭人伝』を受け継いで書いてあるのもありますが、同時に独自史料もある。もっとも有名な独自史料は、九州博多湾志賀島から出土した金印に関する、

建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀す。使人自ら大夫を稱す。倭國の南界を極むるや、光武賜うに印綬を以てす

の記事である。建武中元二年に後漢の光武帝が倭人に金印を与えたという独自史料で、南朝宋の范曄（はんよう）が、見つけてここに記載した。まさに志賀島から金印が出土したからリアルな記事であった。ところがもう一つ独自資料がある。

◎『後漢書』倭伝

女王國より東。海を度ること千餘里に至る。拘奴國は皆倭種、女王に屬せず。

同じ倭種であることは魏志倭人伝と同じ情報であるが、加えられた情報に「海を渡ること千余里」とある。この情報はまったく魏志倭人伝にはない。范曄が後漢代の独自史料を使ったと考えざるを得ない性質のものである。魏志倭人伝にあった文章をそのままひき写した文章ではない。それで合田さんと話していて、わたしも驚いたのだが、「これは長里かも知れませんね」という言葉が、飛び出した。

長里・短里の問題は、深く立ち入りませんが、中国には長里と短里があった。周代は短里である。周代にできた『四書五経』の史料は、すべて短里である。それを現代中国をはじめ、みんなが、長里で解釈するのは間違いである。そうわたしは言いました。それにたいして秦の始皇帝が陰陽五行の概念を信じて、長里という概念をつくった。今までの里を六倍にした。彼は六という数が非常に神聖であると信じていたようだ。天子を引く馬の数も六頭にする。従う車の数も六の倍数にする。そのように変に縁起をかついだ。そのようなことは、司馬遷の『史記』始皇本記に書かれている。それで里単位も六倍にされた。それまでの周代の一里・七六メートルあまりから、六倍の四三五メートルに拡大された。その拡大された長里を前漢が受け継ぎ、後漢も受け継いだ。

これに対して魏・西晋は、周の短里に復帰した。周を受け継いでいるとして復古した。ところが、その西晋が滅んで東晋になると、また長里に復帰した。その東晋以後、南朝劉宋・陳など、すべて長里です。以上が短里と長里の歴史です。

としますと、『後漢書』で范曄（はんよう）が、後漢代の独自史料を使ったと考えますと、この「千余里」は長里である。短里と見るべきではない。他は短里である。「一万二千里」、「四千餘里至侏儒国」などは、『魏志倭人伝』をそのまま写して書かれてある。ところが「女王國より東、海を渡ること千余里」の部分は『魏志倭人伝』にはない。

そうしますと金印の記事と同じく、後漢代の独自史料を用いて書かれていると考えるのが筋である。後漢代に短里が使われていた形跡はない。わたしも他の学者も後漢の時代は長里であると考えている。すると長里で千里は、短里では六千里になる。朝鮮海峡は三千里、海峡だけですが。六千里はその二倍になる。原点はどこか。迷っていましたが女王国と書いてありますから、原点は博多湾岸。そこから短里で六千里。関門海峡までは千里。そこから更に五千里、五倍。これでは瀬戸内海は収まらない。ハミだします。わたしも狗奴国については、以前からだいぶ苦労して考えていました。それで讃岐というサヌカイトがある古代文明の地も知ったのですが。それらは全てチャラ。すっ飛んでしまった。あるいは河野水軍の地ではないか。これは合田さんが、四国の郷土史家の見解を紹介して、どうでしょうかと尋ねていただいた。これも以前に、本居宣長が河野水軍が狗奴国ではないかと紹介しています。

またわたしが少年時代を過ごした広島県三次盆地は古来、甲奴（こうぬ）郡と言いましたし、友人がいた甲田市という町もある。これもあやしい。あやしいけれども、これも国の中心になりそうにもないし、鉄器の中心でもない。鉄器の中心は瀬戸内海では圧倒的に四国香川県の詫間が中心である。ですから鉄器を中心に考えれば、詫間が中心になるけれども、そこにはべつに「コウヌ」「コヌ」という名前はありません。ですから分裂していて、考えは星雲状態にあった。しかし今回の場合は整合性がある。

後漢代の范曄が、金印とおなじく後漢代の独自史料を使ったと考えますと、范曄が短里を使ったはずはない。長里で表現している。すると瀬戸内海では収まりきれない。東まで、近畿まで来る。銅鐸国になるのではないか。そういう見通しになった。

それで近畿に「コヌ」という地名はあるのかと言いますと、存在します。『古代史の十字路 一万葉批判』（東洋書林）という本を二〇〇一年に出しましたが、その中で交野

山（このやま）に触れています。これは奈良県側に生駒市高山地区といわれる所があり、そのつづきの一番高いところが交野山。今の行政区画で大阪府交野市になっていますが。ここへ奈良県の郷土史家の方に連れて行っていただいて、登ってみて驚いた。ここは三方が見おろせる。大阪府はほとんど見下ろせる。大阪城も。もちろん京都市内も、比叡山を含めほとんど見渡せる。奈良市も見える。若草山が見える。大阪・京都・奈良の三都が見おろせる。このときは「高山」の問題で訪れました。

この交野山。これはもちろん当て字でしょう。交通に便利な山というわけでは、ないでしょう。この交野山は、ほんらいは神戸の「神」が付いた神野山（このやま）。

「ノ」を「ヌ」と考えても同じことです。神の野が見おろせる山。この表現が最適なところですよ。

交野（かたの）市といっても、これは関西以外の普通の人には、これはほとんど、そうは読めません。交野（この）市と言ってしまう。しかし、これは交野（かたの）市です。それで、その「カタ」ですが、枚方もそうですが、ほんらい瀧（かた）のあるところという地形名詞の日本語ですが、なぜか「交かた」と字を当てます。

これは古いこの地名の呼び方。それは、譲りたくない。

ですから交野（かたの）と、読めなくとも読ませれば良いのだ。

そのような強引な字で、コウノまたはコノという読み方が残ったものと考えています。

それで、あの山や平地は、神野と呼ばれる一大地帯です。

この神野と呼ばれる地帯の一画に、銅鐸の鋳型の出るところ東奈良遺跡（茨木市）もあります。ですから拘奴（コノ）国と呼ばれる地帯は、簡単に言えば兵庫県南部・大阪府北部・京都府南部の地帯を、そう呼んだのではないかと。

この考えの良いところは、問題の高地性集落が対象となる。高地性集落、これはその山のかなり高いところに集落を作っている。

森浩一さんが、うまいことを言われる。「かなり登って行って、ふうふうと息切れがする。もうたくさんだと思ったところが、だいたい高地性集落にたどり着いたところである」と。

このように、かなり高いところにある。これはたいへん不便な話で二重生活。普段は田を耕しているのは平地である。水があるのも平地である。弥生時代の主たる生活の基盤は平地にある。ところがこんな高いところに集落を作っても、水はないし、ふだんは住めない。

簡単に言えば逃げ城である。

神護石山城のようなもので、敵が攻めてきたときに逃げ込む、第二の集落です。

いつも二重生活を強いられる。たいへん不便です。

ところが、このような高地性集落が、瀬戸内海の北岸部、広島県・岡山県・兵庫県のところに、点々とあることはご存じのとおりだ。

それが一番密度が濃いのは、兵庫県西南部・大阪府北部・京都府南部・奈良県北部。この地帯の人は、恐怖すべき敵が目の前にいた証拠である。

現実の敵が目の前にいないのなら、あんな不便なものは、わざわざ作りはしない。
そこに拘奴国が存在すれば、考古学的見地から兵庫県東南部・大阪府北部・京都府南部・奈良県北部の地帯であることが言える。

この問題もわたしの目から見ますと、倭国が国家であることに反対する人はいないと思います。弥生時代から国家は始まる。これは教科書にも書いてあります。当然文句なしに、三種の神器を中心に祭祀とする博多湾岸の国家である。それはよいのですが、それに対立する銅鐸圏ありという言葉。これも変な言葉で、そこだけ「銅鐸圏」で、国家ではない。

これは、おかしいでしょう。言葉は悪いが、あの三種の神器如きのレベルのものが出ても国家なのです。

それに比べて銅鐸は、銅製品のレベルから言えば三種の神器よりも、もっと技術的レベルは上回っている。

しかし、それを作るところが、単なる原始共同体で国家ではない。

この共同体という考えは、（京大の）小林行雄さんがマルクスの言葉を使って言ったから、その時点ではだれも反対しなかった。マルクスの言葉に逆らうものは、マルクスの敵である。反動である。いまから考えれば、思いもよらない時代の考えでした。

しかし、それは過去の迷信となりましたから、それにこだわらずに考えれば、三種の神器を中心に祭祀とするものが国家なら、銅鐸を中心に祭祀とするものも国家である。

その二大国家が対立していると、考えても、おかしくはない。

ですから考古学的分布図との関わりが、すんなり収まってきたと考えます。

その点が仮説ですが、これで良いのではないか。

文献解読でも後漢代の史料だから、長里で記載してあると考えることは筋論として正しい。それと考古学的分布図と対応していると考えることができる。

これは仮説というか、試案が入ってきますが。この二回目の「奴國」。

これは京都府舞鶴近辺ではないか。

籠（この）神社がある。この神社は「ノ」をいれて、かならず「コノ」神社と言う。

ですから、先頭の「コ」が、神様の「コ」か、子供の「コ」か知りませんが接頭語を付けた「コノ」ですから、むしろ語幹が「ノ」で、実体を表している。

それで、この「奴ノ国」。昔は「奴又国」と読んでいましたが、最近では奴隸の「奴」は、「ノ」と読んで良いのと言われているので「奴ノ国」。

なぜ舞鶴近辺かと言いますと、とうぜん「国ゆずり」という奪権の後では、出雲は倭国の支配下に入っています。

広く考えれば越の国（福井・石川・富山）も出雲と仲が良かったから、そこも支配下に入ったと考えられないことはありません。

ですが、それでは新潟県まで女王国の支配下に入って、その南のほうに拘奴国があるということになる。そうであってもかまわないが、それでは、そんな遠くの拘奴国と倭国が戦

争していたことになり、もう一つぴんと来ない。また高地性集落が関東・東海あたりに比較してたくさんあるという話も聞かない。そうしますと越の国は、独自の勢力を持って、屈服しなかった。

それで越の国は、ストレートに倭国・天照大神の支配下に入らなかったと考えてみました。そうしますと、女王国の勢力は、舞鶴止まりである。そうしますと二番目の奴（ノ）国は、籠（この）神社のある舞鶴となる。

この考えは仮説を入れた考えですから、ぜったい間違いないというつもりは、ありませんが、一つの見通しとして考えて良いのではないかと。